

過ぎ、十二月初旬パリを出発、リヨンに二、三日滞在した後オランジュ、アヴィニョン、タラスコン、ニーム、ムーラン、アール、マルセーユ、フレージュス、サン・ラファエル、ニースを巡りモナコでクリスマスを過した。

同年十二月二十七日イタリアに入国、ゼノア、ピサを経て同月三十一日ローマ着。同地で正木直彦宛てに書いた手紙（大正十三年一月三日）には四月頃までの間にシシリ島、ギリシャ、コンスタンチノープル、ハンガリー、オーストリア、チェコ、スイス、スペイン等を巡歴して五月中にパリに戻り春のサロンを見物してイギリスに渡る予定と記されている。

『東京美術学校校友会月報』第二十三巻第四号には津田がパリ滞在中に執筆した「日本工芸協会に望む」が掲載されている。これは翌十四年四月開催予定のパリ万国裝飾美術工芸博覧会へ出品する者のために西欧の芸術思潮を紹介し、日本の工芸美術のあり方を説き、発奮を促すためのものであった。

大正十三年七月初めに津田はロンドンへ移り、そこで上記博覧会囑託の通知を受けた。その後スペインを旅行し、十二月にパリに戻った。そこでは在外研究のために到着した同僚の田辺孝次と会い、一緒に見物し、また、デルスニスとも交流があった。

翌十四年三月八日、津田の留守宅が類焼を蒙り、工場のみ難を逃れた。また、この月、津田の滞欧期限も満期となった。しかし、彼は前記博覧会用務のためパリに留まった。同年四月二日の正木直彦宛津田書簡を見ると、津田はこの博覧会に対する日本側の処置、特に配慮を欠いた展示方法、自分に対する不当な待遇に憤激を抱いて

いたことがわかるが、ともかく用務を了えて同年十二月二十五日に帰国し、復職した。

⑨ 日仏交換美術展覧会

大正十一年四月から六月にかけて、日仏両国政府および民間篤志者の協力による日仏交換美術展覧会が開催された。即ち、パリではサロンの開期に合わせてシャンゼリゼー広場前美術館で日本美術展覧会（四月二十日～六月三十日）が、また、東京では農商務省商品陳列館でフランス現代美術展覧会（五月一日～同三十一日）が開かれたのであるが、新しい試みであったため、両方とも盛況を示した。この両展覧会については正木直彦、黒田清輝、久米桂一郎、和田英作、北浦大介その他本校職員たちが大いに尽力したので、その経緯を記す。

(一) 日本美術展覧会

大正十年五月（同月二十九日付『読売新聞』による）、フランス政府より日本美術展覧会開催の申し込みを受けた日本政府は、文部、外務両省管轄下に準備を進めることとし、本校の黒田清輝、正木直彦、久米桂一郎らにその任務を依頼。そこで彼ら首脳部は現代作家の日本画、西洋画、彫刻、工芸品と古美術品を出品することに決めた。出品勧誘に着手した。『東京美術学校校友会月報』第二十巻第五号を見ると、同年十一月十日に工芸美術会（本校内）は上野精養軒で全国工芸家大懇親会を開き、正木直彦と久米桂一郎の臨席を得て同展覧会に積極的に協力する方針を決めたという記事が掲載されており、出品勧誘が着々とすすめられたことがわかる。その結果、

同年末には四百五十点の作品が集まり、翌十一年一月十日、久米桂一郎が文部省の命によりそれらの作品とともにパリへ向かった。

パリには和田英作（文部省から欧州出張を命ぜられて十年五月九日出発、十一年九月十四日帰国）が滞在していたが、彼に対しても文部省から同展覧会に関する事務に従事するよう命令が下された。

和田は参加を予定していた万国美術会議（開催予定地ベルギー）が中止になったため、この役目を仰せつかったのであった。かくて久米と和田は展覧会開催に向けてその準備に奔走したが、その模様を坂崎坦は次のように報じた。

サロンの事

巴里にて

坂崎生

春のサロンに出品する日本美術品は二月下旬に滞りなく巴里に着いた、目下グランパレーに保管されてある、在佛帝國大使館は其一部を開放して展覧會事務所に宛て久米桂一郎氏を初め和田英作、永地秀太、堀義二（大正二年本校彫刻科卒）、それにエリセーフ君が加つて着々準備をやつて居る、豫定より作品が多い爲めサロン當局と計つて陳列場を延長する事やら日本美術部には特に請願巡查を置いて看視させる事などが決つた外にカタログの製造、ピラの意匠、プロバガンダの方法等があり議せられる事が多い、ピラは近藤浩一路（明治四十三年本校西洋画科卒）君の筆になる「能面」を採用するらしい、プロバガンダとしては先づ當地の新聞記者を招いて一齊に記事を掲載して貰ふ事、會場がシャンピリゼー通りに向つた形勝の地位にあるのを利用して此邊に大意匠を凝らすといふ事である 當地在留の日本畫家は八九十人は居るが

此中で出品するものは僅僅三名に過ぎないと傳へられて居る、尤も開會間際になつて見ねば確な事は云へないけれども出品の勸誘方が當を得て居ないと云つて畫家仲間の反感は甚しいものである、最初在佛日本畫家の爲めにとつた日本藝術部は何時の間にか其生立と反對の現象を呈する次第である。

（大正十一年四月二十八日『東京朝日新聞』）

開會式の模様は同じく『東京朝日新聞』（同年四月二十五日付）が伝えており、それによると、当日総理大臣ポアンカレ、殖民大臣サロー、イタリア、スペイン、ベルギーの駐仏大使その他数百名が來場して文展の初日以上の賑いを見せ、新聞も盛んにこれを採り上げたことが判る。

なお、日本美術展覧會開催中に本校書記（帝國美術院書記兼務）北浦大介も文部省より欧米出張を命ぜられ、五月二十六日に出発した。その目的は日本美術展覧會の後始末を兼ねて各国を廻り、展覧會の陳列法などについて視察することであつた。北浦はアメリカ合衆國、フランス、イギリス、ベルギー、オランダ、ドイツ、スウェーデン、イタリア、オーストリア、チェコスロバキア、エジプト、パレスチナ諸國都市の美術館、博物館等を視察して翌十二年一月二十日に帰国する。ところで、北浦のような本校事務官の欧米派遣ということは初めてのことで、新聞にも大きく採り上げられた。大正十一年五月二十六日の『國民新聞』は「異數の技擢」という見出しで報じているが、その記事のなかに注目すべき記述がある。その一つは「先般日佛交換展覽會の用務を帯びて佛國へ赴いた同校教授久

米桂一郎氏が佛國始め諸外國の展覽會場に於ける、繪の陳列方法、光線の工合其他設備事務等に就て調査して來る筈であつたが同教授が都合により急に歸朝したので北浦書記が拔擢され「云々」という記述である。久米がなぜ急に歸朝（同年六月十五日）したかは明らかでないが、彼の渡欧が日本美術展覽會用務の遂行だけではなく、西歐諸國の展覽會場の視察をも目的としていたことがこの記事によってわかる。このことは「久米教授海外旅券交付方上申案」〔大正十一年職員ニ関スル書類^{庶務}〕に旅行地名が仏、英、伯、伊と記されていることとも符合する。もう一つは記事の中の北浦の談話筆記に「……………其他來年四月から實施する男女共學の模様等を約五ヶ月間の豫定で視察して來る筈である」と記されていることで、これは本校で懸案となつていた女生徒募集問題（71頁参照）が相当具体性を帯びて來ていたことの一証左となる。

出品作は日本画、西洋画、彫刻、工芸品、参考品（古美術品）から成り、古美術品の部には本校や東京帝室博物館、帝室をはじめ各所藏家が出品した。『東京朝日新聞』のバリ特派員は盛況を伝える中で「参考品に次いで日本畫は大評判であつた。木村武山河合玉堂鷹取稚成、榎本一洋梶原緋佐子等の作品が問題となつた」と報じ、『報知新聞』は久米桂一郎の談話として「栖霞春舉など京都畫伯の淡彩畫は引つ張ダコの賣行を呈している」と報じ、『読売新聞』は中村彝の「エロシエンコ氏の像」が好評を博したことを伝えている。

閉會後、作品は和田英作の監督の下に大正十一年九月十日神戸入港の郵船箱根丸で帰着した。当時の諸新聞を見ると、この展覽會が

大成功であつたため外務省が今後日本文化を海外へ広く紹介する方針を決めたことや、フランスでも翌十二年の帝展に一流畫家の作品約百点を出品する計画が持ち上がり、アマンジャンも来日する予定である（同年九月十一日『大阪毎日新聞』所載和田英作談話筆記）などという記事が掲載されており、日仏美術交流氣運の盛り上がりを見取することができる。なお、この展覽會の費用一切を負担したのは大阪の実業家岸本家であつた。パリにおける日本美術展覽會はこれ以後暫く開催が無く、昭和四年に至つて第二回目が開催される。

(二) 仏蘭西現代美術展覽會

仏蘭西現代美術展覽會（第一回仏展）については「フランス展十年略史」〔十週年記念フランス美術展覽會〕昭和六年。日仏芸術社）に次のように記されている。

佛國大使ポール・クローデル氏と子爵黒田清輝氏の盡力により開催。時の文相中橋徳五郎氏、農相山本達雄男、古市日佛協會々長、正木〔直彦〕東京美術學校校長等の賛助によつた。陳列品は油繪二六三點、水彩、素描六四點、彫刻及メダイニ八〇點、外にセーヴル陶器、ドーム玻璃器等の工藝品百數十點、會場狹隘の爲め中途で陳列替をした。會期中長くも、攝政宮殿下、秩父、閑院、久邇各宮殿下の臺臨^皇があつた。

なお、同年六月には引き続き大阪商品陳列場でも大阪朝日新聞社主催により開催された。

この展覧会の実質上の主催者はデルスニス(Herman Doelsnitz 1863〜?、本書191頁参照)であった。日本人のフランス美術志向に着眼し、フランス現代美術の実物を日本に紹介することを思い立った彼は、大正十一年春、リュクサンブール美術館長ベネディクトの採択にかかる多数の作品を携えて来日した。彼ははじめフランス文部省に働きかけ、その後援を得、それが当時の駐仏大使石井菊次郎を通じて黒田清輝に連絡され、さらに黒田の依頼により黒田鵬心(国民美術協会常務理事、三越勤務)が日本側の実務担当者となったのである。そして、パリでの日本美術展開催準備が着々と進んでいる折りから、日仏両国政府は日仏交換美術展覧会と銘打って前者と同時期に開催することとしたのであった。

出品された絵画のなかにはピサロ、ゴーギャン、アンリ・マルタン、ボナール等の作があり、彫刻のなかにはロダンの「守護神」「ベロンヌ」「青銅時代」その他が含まれていた。フランスの現代美術がこのように多数展観されたのは初めてだったので、会場は非常な賑いを見せ、約五万二千人の入場者があったという。

デルスニスは以後毎年作品を携えて来日し、展覧会を開いた。大正十三年にはデルスニスと黒田鵬心の共同経営による日仏芸術社が設立され、和田英作、中條精一郎、石井柏亭、左右田喜一郎、田辺孝次、太田三郎、遠山五郎が社友としてこれを助けることになり、翌十四年七月には機関誌『日仏芸術』が創刊された。仏展の絶頂期は昭和三年の第七回展のときで、その後財政に破綻をきたして次第に行き詰まり、同六年の第十回展が最後となった。ただし、同年には十周年記念フランス美術展が日仏画廊で開かれ、買上げや寄贈に

よって日本に留った作品の一部が展示された。

仏展については毎回発行されたカタログが東京国立文化財研究所に收藏されており、また、黒田鵬心著『巴里の思出』(鵬心選集第九巻、昭和三十一年、趣味普及会)に詳細な記録がある。デルスニス個人については後述する。

なお、附記すれば、仏展には本校職員が大いに協力したが、その具体例の一つは次の大正十二年三月十五日付『東京朝日新聞』記事である。この記事は本校内における第二回仏展出品作の荷解きをするデルスニスらの写真とともに掲載されている。

遠來の美術品 けふから荷解き

マチスやピカソの逸品

巴里からデルスニツ氏が持つて來た佛蘭西近代の繪畫彫刻展覧會は四月三日から花に賑ふ上野竹の臺に四月〔矢字〕中 されるが作品は成るべく新しいものをとの方針から彼地の春といはず秋といはずサロンの名家が網羅されて居り、繪畫は總計五百五十點、彫刻は百五十點、この外工藝美術品も數百點ある、洋畫中の呼物中には有名なマチスの面白い人物畫が三點、若き人達の懂れの的となつて居るピカソの作品も二點又ロダンの『地獄の門』の一つもある、十四日朝來美術學校工藝部教室でこれ等の荷解きが始まり、正木校長も見物に來る、多數人夫等は嬉しさうに箱から取出して居た

後述の「青銅時代」や「バルザック」の本校への寄贈はこのよう

な協力によるものであった。

⑩ 帝展第四部開設への動き

官展に第四部（工芸部門）を設ける運動については既に触れたが、一向に実現を見ぬまま大正十一年に至った。この年、本校教授黒田清輝が帝國美術院長に就任。工芸界の期待は大いに高まった。新聞はこれを次のように報じている。

帝展に第四部新設 明年から工藝美術を加へる

外國に無い日本の純美術獎勵、黒田院長の決意

日本畫、洋畫、彫刻の三部に限られて居る帝展に第四部を設けることが決定になつた、それは多年の懸案であつた工藝美術を收容することになつたのである、文部省公設展覽會の創始時代には先づ純正美術の獎勵を圖るに急であつたが日本の工藝には外國に其比を見ない立派な純美術的のものがあるから國費を割いて隆昌を期する斯る獎勵機關には當然加入すべきものであるとの主旨によつて美術工藝増置の運動は文展の中期から起つて今日に迫り現帝國美術院長黒田清輝子を會頭とする國民美術協會なども其の急先鋒であつた、處で黒田子が美術院長に新任したのは早天に雲霓を望んだ如く勇氣づいて學校派の津田信夫氏と民間派の赤塚自得氏は先般打揃つて院長を訪問し元來賛成者であつた立場から是非に其の盡力を乞うて承諾を得たのである、美術院では幹事の正木氏も賛成側であり福原審査委員長にも異存がないらしく其後都合に纏まつたと聞いたが經費や會場の關係で却々ウンと言はな

つた文部當局も院長幹事の説明で割合に輕少の費用でも事足り美術界の希望を容るゝことが出来るのを知つた結果急速に進轉して來年度の豫算に計上するまでに運んだのである、目前に迫つた今秋の帝展を限りとして明年からは四部制が實現されるであらう

經費は一萬圓位

正木直彦氏談

『帝展に工藝美術の一部を設けることになつたのは事實である此の問題は以前からの懸案であつたが機運が熟したのである、今春平和博美術館の工藝部で綜合鑑査を試みたのも豫め斯ういふ時期の到來を考へて行つたので相當の成績を挙げ得たから手心は判る、只會場や陳列棚新設備等の問題があるけれど現在の竹之臺陳列館を標準にしても百坪位の區劃を割けば可いのだし新設備といつても豫算年額一萬圓足らずの増加で濟むのだから來年は必ず實現が出来るといつても差支あるまい』

（大正十一年十月六日『國民新聞』）

こうした期待にも拘らず、次の記事が示すように、第四部設置は見送りとなつた。

工藝美術品の帝展入りは延期

豫算五萬圓削除さる

帝展に工藝美術作品を收容したいといふ望みは多年工藝美術家各團體からの意向であつたが文部省も黒田帝國美術院長新任と共に過般從來の三部制度に追加して第四部工藝美術豫算を計上し極力通過につとめたが大藏省で右豫算は削除されまた一年延期とな